

太宰が甲府で生活していたことは、有名な事実であり、妻となった石原美智子は甲府の出身である。甲府を舞台にした作品も、いくつとなく書いてある。

もっとも有名なのは『富岳百景』だろうか。その最後の一文で、甲府の見合い先の家、石原家だったのだろうが、そこから見た富士を、

「酸漿に似てゐた」

と締めくくっている。甲府で生まれ、高校を卒業するまで、甲府で暮らした私は、はじめて読んだとき、たぶん中学生だったと思うが、

「ほおずき、ときたか」

と、一人悦に入り、部屋の窓から山々の向こうに見える富士を見た。とても酸漿には見えず、それもあって、勝手に太宰はすごいと興奮したものである。

『薄明』という短篇は、戦時中、甲府に移住したときのものだ。甲府の町も空襲に遭い、甲府盆地を見やる山奥の家から、炎上する甲府を見ている風景が描かれている。空襲で燃える甲府の町に太宰はいた。さらに『新樹の言葉』を読んでもみると、甲府について、

2
より細かい記述がある。

〔甲府の火事は、沼の底の大焚火だ。ぼんやり眺めているうちに、柳町、先夜の望富閣を思いだした。近い。たしかにあの辺だ。……舞鶴城跡の石の段々を、多少ぶるぶる震えながらのぼって行って、やっと石垣の上にとどりつき、見ると、すぐ真下に、火事が轟々凄惨の音をたてて燃えていた。噴火口を見下す心地である。〕

恥ずかしながら『新樹の言葉』を読んだのは、つい先日だった。読んでいるうちに、この甲府の火事が、柳町の辺りであり、

〔けどものの咆哮の音が、間断なく聞こえる。……「すぐ裏に、公園の動物園があるのよ。」妹が教えてくれた〕

という記述を読むと、火事の熱さとは逆に、全身の神経が氷の刃となった。



ノートパソコンに〔ひづけ〕と打ち込み変換すると、2011×年8月13日と出た。旧暦の盆の入りである。

じつとしていられなくなつた。Tシャツにジーンズという姿のまま、財布の中身を確かめ、五千円札があつたのを幸い、高円寺の安ア・パートを飛びだした。

ふだんなら中央線の下りに乗って、高尾まで行き、そこから各駅停車に乗り換える。

しかし、今日は、少しでもはやく甲府に着きたくて、新宿へ出て、発車寸前だった特急あずさに飛び乗った。お盆の帰省ラッシュのせいで、車内は混雑していた。指定席はもちろん、自由席もすべて埋まっており、通路も立ち乗りの客でいっぱいだ。仕方なくデツキの、扉のところに入った。

ぼんやりと外の景色を眺めながら、甲府に戻るのはいっつ以来か考えた。かんたんに記憶はたどれた。三年前の二月、母の三回忌に出て以来である。母の三年前に父が他界し、三つちがいのは母は、その三年後、年齢を合わせるように旅立った。

「お盆か」

ぼつりつぶやくと、それが合図だったかのように、幼い日、母から聞いた言葉が脳裏に浮かんできた。あの日、母に連れられて太田町の動物園へ行った。やはりお盆休みだった。それもあって、動物園は人でごった返していた。

まだまだ甲府に活気があった時代だ。動物園の入口には行列ができていて、動物園前の公園で順番待ちをしているとき、母がぼつり、口を開いた。

◇ ◇

文ちゃんと同じ歳くらいだったかな。いや、戦争が終わって一年後のお盆だったから、お母ちゃんは十二歳だった。弟たちといっしょに、太田町公園まで遊びに来たんだと思

4 う。でも気づいたら、ぼんやり、一人になっていて。

ああ、皆、どこへ行ったんだろ。迷子になって、泣いてないかな。

そんな風に思つて、公園の奥へ行ったら、櫓が組まれ、大勢の人が盆踊りをしてた。ぐるり見回したけど、弟たちの姿はない。困ったなあ、とさらに奥へ行くと、動物園の近くの暗闇の向こうから、同じように太鼓の音が聞こえる。

薄暗く、人けが途切れていたので、ちよつと怖かったけど、もしかして、と、そつちへ行つたみた。そうしたら、木々を抜けたその先に、やはり櫓が組んであつて、人々が丸くなって踊っていた。

何で二つもあるんだろう。こつちのほうは隣町かな。でもなんだか……。不思議な感じがした。薄暗くて、全体がぼうつと闇に溶けているみたいだった。かなりの人が居るみたいだけれど、暗くてよくわからない。太鼓の音も小さく、蒸し暑い夜だというのに、ぶるぶるつと身体が震え、二の腕に鳥肌が立った。

この中に弟たちが混じっているのか。目を懲らしているうちに、気づいたことがあつた。皆、裸でなにも着ていなかった。盆踊りを楽しんでいるというよりも、秘密の儀式に高じているみたいで、ますます鳥肌が広がるのがわかつた。

それでも、草履の裏が地面にくつついたように動けない。人々は裸で、ゆつくりと踊

っている。年老いた者もいるが、まだ幼い子どもの姿もみえる。

すると、その中のひとりの女の人が、こつちを見て、手招きしている。誰かと思うと、死んだ母親だった。母が死んだのは、それより四年あまり前だった。七人の子どもを産み、食糧難の時代で身体が参ってしまったのだろう。三十七の若さだった。死んだとき、兄弟みんな泣いた。なんで死んじゃうんだよ、と弟たちといっしょに遺体にしがみついたものだ。

お母ちゃんと呼び、そっちへ走ろうとしたとき、後ろから、お姉ちゃんと呼ぶ声があった。振りかえると弟たちだった。

「何してるの？」

と訊かれ、

「ほら、あそこにお母ちゃんが」

と前方を指さした。しかしそこは木々にさえぎられて、月明かりもささない暗闇が広がっているだけだったんだよ。



母が正しくこう言ったかは、たしかではない。後になって、たぶん頭の補足したのだろうが、大意にまちがいはない。

さらにそれが呼び水になったか。炙り出しの文字が、熱を帯びると浮かび上がってくるように、べつの記憶がよみがえる。そう昔の記憶ではない。六年ほど前、すでに母が施設に入っていたときだ。

入所してからほとんど寝たきりの状態で、起きていても、ぼんやりとしている時間がほとんどだった。あの日、施設を訪ねたのは、午後四時近い頃だった。

おやつが終わり、消化を助けるため、三十分近く上半身を起こしておく。母はぼんやり、窓の外を見ていた。声をかけると、わずかに、こつちを見た。いつもはそれだけで、目を閉じるか、視線を逸らしてしまう。なのに、このときは、わずかに首を縦に振った。

「どう、具合は？」

訊ねると、なおも私を見つめ、

「今晚、お父さんが来ると」

と言った。

父はそのとき、二年前に死んでいた。五月七日が命日で、この年の四月下旬に三回忌を済ませていた。母も車椅子に乗せて、参加させた。両手を合わせるのにも、姉が手を添えなければならず、焼香は私が代わりにやった。

「何を言ってるで」

私は苦笑いした。と、虚ろだった目に、線香のようだったが、ぽつと光りが宿った。
「覚えてるけ」

「なにを？」

「むかし、話したら。戦後、太田町動物園の前で、迷子になって……」

そこまで言つて、母は目を閉じた。つづきを待ったが、かすかな寢息を立てた。



その晩、施設から実家に電話があつた。実家を引き継いでいた姉一家は、夕食に出かけており、帰省していた私が一人で留守番をしていた。施設の人はい挨拶もそこそこ、母が居なくなつたと言つた。

悪い冗談かと思つた。歩くどころか、一人で寝返りさえ打てない。まして居なくなれるはずがない。しかし施設の人は真剣に、くりかえす。

とにかく自転車で、施設へ駆けつけた。母はベッドで寝ていた。

「ほんとうにいなかったんです。どこを探しても。それなのに、いつの間にか。……すみません。ばたばたしていて、かんちがいしたんだと……」

施設の人は詫びた。

「いいんです、こちらこそ、お世話になりっぱなしで」

詫び返し、施設を出た。時刻は午後八時になろうとしていた。



あのとき、母が何を言っているのか、わからなかった。しかし、今はわかる。先に書いた話のことを言っていたのだ。そして、あの晩、母が施設からどこへ行ったのか。暗闇の向こうから、ぼんやり、灯りが灯るように、ひとつの光景が浮かぶ。

にぎやかな盆踊りの向こうの、闇の奥に、もう一つ櫓が組まれ、全裸で踊っている人々がいる。そこに母の姿も見える。となりにいるのは、若くて、きれいな女性。誰だろうと、思ったとき、仏間に飾ってある写真の女性と重なった。母の母、つまり会うことかなわなかった祖母である。

「すみません、降りるんですが」

後ろから声をかけられた。電車の扉は開き、甲府と声が聞こえる。

「すみません。ぼんやりしてて」

足早に、ホームに出た。かなりの人が、あずさを降り、人波に押されるように改札へ向かった。播り鉢の底、すでに日は南アルプスの向こうに、姿を消しかけていたけれど、甲府盆地はじりじりと暑く、汗が噴き出し、いっしょに思考まで流れ出たらしい。

ふと一息ついて、足を止めたとき、高台にいた。太宰が火事を見下ろしたと書いた、

舞鶴城公園に立っている。夕焼けが、シャッター街と化してひさしい、甲府の中心街を照らしている。

いけない、面会時間が終わってしまう。足早に舞鶴城跡を後にした。駅前に戻ると、運よく、施設のそばを通る乗り合いバスが止まっていて、飛び乗った。

◇ ◇

施設の入口わき、事務所の受付に顔見知りの職員がいた。

「ご無沙汰してます」

「こちらこそ」

職員は笑顔を浮かべる。事務所が騒がしい。

「なにかあったんですか？」

「少し前に、下りのあずさが、甲府駅の手前で脱線して。かなりの犠牲者が……」

「お盆だつていうのに、たいへんですね」

「ええ。……で、今日は？」

「離れて暮らしているからといって、お盆くらいは顔を見せなくては」

「はあ？」

「部屋は同じですよね？」

10 「部屋って……」

「わかりますから」

職員に頭を下げ、エレベーターへ向かった。母のいる部屋は四階にある。運よくエレベーターが止まっていた。

「ちよつと、飯野さん」

呼び止める職員に、会釈したとき、扉が閉じた。母に会うのは久しぶりだ。わかるかな。いや、わからなくても、いいよ。

母の部屋へ行くと、見知らぬ老女が、夕食を介助されていた。

「あなたは……」

介助していたのは、見覚えのある女性だったので、ぺこりと頭を下げる。そうか、部屋が変わったんだな。一階にいた職員は、それを言おうとしたのか。それは悪いことをした。後で謝ろう。

「母は？」

「お母さんって……」

介助の女性は口をつぐみ、視線を逸らす。わきにもう一つ、ベッドがある。そうだ、この部屋は二人部屋だった。入居者が増えて、相部屋になったらしい。もうひとつが母

のベッド。しかしベッドは空だった。

「そうか、盆踊りに行ったんだ」

それなら、急いで向かわなければ。

急ぎ足で施設を出ると、運よく空車のタクシーが通った。

「太田町の遊亀公園まで、お願いします」

「もう動物園は、閉まっているでしょう」

「いえ、盆踊りに行くんです」

「盆踊り、やってるんですか？」

「ええ、母が先に行つて、待つてるんです。母だけじゃない、みんな。きっと、みんなが。だからすみませんが、急いでください」

「わかりました。今日は盆休みで、市内の道は空いてますから」

「……」

「そうですか、盆踊りをやってるんですか。あそこは五月の〈正ノ木祭り〉が有名だけど、盆踊りもやっていると知らなかった。まったく甲府も、めつきり寂れちまいました。が、せめて、そういう風習だけは残ってほしいもんですよね」

12 「着きましたよ。動物園の入口近くでいいんですね？ お客さん？ お客さ——」

◇ ◇

すでに日はとっぷり暮れて、暑さはへばり付いているものの、闇が濃くなっていた。心細くなったが、歩を進めると、暗闇の向こうに、ぼんやりと明かりが見える。間に合った。人々が丸くなって踊っている。目を凝らして、母を探す。

「文ちゃん。文ちゃん」

手招きしているのは母だった。

「遅くなっちゃって」

「ううん。来るって、わかってたから。どう、仕事は？」

「う、うん……」

母の顔色が曇った。つらさに負けて、

「どうやら、今度こそ、傑作が書ける気がするんだ」

「どんなお話を書いているの？」

小説など、何年も書いていない。大学時代の友人から、ライターの仕事をもらい、なんとか糊口をしのいできた。しかし、それももう……。

「甲府を舞台にした小説なんだ」

気がついたら、口走っていた。母の瞳が輝いた。

「ふるさとのことを書いてるのね」

「そうさ。甲府の家で、トイレに立ったとき、窓から富士山が見えるんだ。それを見たぼくは、どう感じたと思う？」

「きれいとか、大きいとか……」

「それじゃ、平凡すぎて、話にならないよ」

「なにかしら？」

「酸漿さ」

「富士山が、ほおずき？」

「そう。甲府の町から見ると、富士山が酸漿に見えるんだ」

「楽しみね。はやく読みたいわ」

母の顔がほころぶ。恥じらいを振りはらい、

「それより、いっしょに踊っていいかな？」

「もちろんよ。みんな、よろこぶわ」

13 母は小走りに、踊りのほうへ向かった。人々に声をかける。振り向いた人々が、私を見て、笑顔を浮かべた。そろって、手招きしてくれる。はやる気持ちをおさえ、衣服を

14 脱ぎ捨てる。

うす暗かった一帯が、沼の底の大焚火と化した。お囃子がわりに、けだものの咆哮が聞こえる。

(了)